

◆池田亮二 選 ～「俳句と酒（現代句から）」～

先に江戸時代の「酒の句」を拾い出してみましたが（平成二十七年六月号）、今回は現代俳句の中を探してみました。まずは現代俳句の先達ともいべき子規居士の句から。

手アリ豆アリ女房ニ酒ヲネダリケリ

名月ヤ枝豆ノ林酒ノ池

酒あり飯あり十有一人秋の暮

虚子を待つ松茸鮭や酒二合

曲水の詩や盃に遅れたる

子規の酒の句は多くありません。三十四歳という短い人生。しかも晩年の六、七年は病床にあったのです。また子規は生来下戸で「日本に生れて日本酒を嘗めてみる機会は多かったにも拘らずどうもその味が辛いような酸っぱいようなへんな味がして今にうまく飲むことが出来ぬ」と書いているくらいだから、写生句として酒を詠んでも、酒に酔い、酔興の句というものはありません。先にあげた句も、枝豆、松茸、飯がご主人で酒は家来という感じですが。

次に「ほととぎす」双璧の一人、虚子にも酒の句はあまり見当たらない。

酒うすしせめては爛を熱うせよ

悦びに戦（おのの）く老の温め酒

嗜まねど温め酒はよき名なり

漱石の日記に「虚子酒がうまいとってしきりに呑む。甚だ太平楽なり」とあり、若い頃は料亭通いもし、少しは飲んだようですが、やはりどちらかという下戸で、同じく下戸の漱石といい勝負といったところのようです。

双璧のもう一人、碧梧桐には、

花に酒居つづけの愚や二日酔

酒を置いて老いの涙の火桶かな

と、やっと酩酊句らしきものに出会います。

さて、意外にも酒の句の多いのが、わが漱石先生です。「坊ちゃん」の赤シャツ

---

教頭に俳句をやりませんかと誘われて、「俳句は芭蕉か髪結床の親方のやるものだ。数学の先生が朝顔に釣瓶とられて堪るもんか」と逃げ出すくだりがありますが、当の漱石は子規の親友でもあり、盛んに句作りしては子規に書き送っています。それが蕉風になろうと髪結床の親方の句になろうとおかまいなく、自由でどことなく滑稽味があるのです。門下生のような東洋城には「先生の句はカラ駄目です。時代遅れです」などとけなされながら、

朝顔や惚れた女も二三日

などという句をつくって悦に入っている風です。そしてご当人も酒には弱く、胃を患って医者には止められているのに、酒の句となると芭蕉、其角に並ぶほど多い。その中から、

飲むこと一斗白菊折って舞はん哉

黄菊白菊酒中の天地貧ならず

酒に女御意に召さずば花に月

酒苦く蒲団薄くて寝られぬ夜

酒少し徳利の底に夜寒哉

或夜夢に雛娶りけり白い酒

飲む事一斗とは豪気なものです。「李白一斗詩百篇」の詩仙に負けじと力んでいるみたい。実際は漱石先生せいぜい二合が限界だったようですが。

子規が提唱した新俳句は、天保以後の宗匠流の卑俗な月並俳句を排して、芭蕉、蕪村の自然描写、写生本位の句への回帰を目指したようですが、その中心となったのは、一高、三高、東大などにたむろする若きエリートの書生俳人たちです。彼らの文学芸術創造の気負いからは、兎角、酔興な酒の句などは浮ばなかったのかも知れません。二百数十年にわたる太平無事の江戸時代と、明治以降のすさまじい近代化の波、ほぼ十年毎に起る戦争（日清、日露、第一次、第二次世界大戦…）と軍国主義による言論統制、更に敗戦後の荒廃と続く時代とでは、酒の味わい方も異なるものとなると見えます。現代句の中の酒は、風流、洒脱の仙境に遊ぶ玉箒というより「酒は涙か溜息か」の恨み酒、しみじみ酒となり

がち、と思うはひが目か。

著名な大家の数少ない酒の句を探し出して挙げると、

十六夜ひとりで飲んで酔ひにけり 鬼城

酔のさめかけの星が出ている 放哉

白酒の酔ほのめきぬ長睫毛 風生

父酔うてしきりに叩く火桶かな 茅舎

僧二人ともに酔い居る蓮かな 石鼎

盃をふくみ春潮を飲むごとし 青邨

人間の雌雄酩酊して半裸 草城

焼酎のつめたき酔いや枯れゆく松 三鬼

置酒独語理非曲直の凍る世を 八束

深酒のぬる湯こほろぎ尻に敷く 桂郎

大杯月をかたむけ牡丹酔ひ痴れたり 井泉水

大酔のあとひとりある冬夜かな 蛇笏

そのような俳界の流れの中で、アウトサイダーともいうべき山頭火だけは、一人超然として放浪し、山に溺れ酒に溺れていました。その作、

ほろほろ酔うて木葉ふる

酔うてこほろぎと寝ていたよ

酒をたべている山は枯れている

さて、今どきの飲んべえ俳人はどんな風に酒をうたうでしょうか。

(二〇一七・四・一四)